

親鸞仏教センター通信

2010.
December

第36号

2010年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

真 宗 学

親鸞仏教センター研究員 花 園 一 実

昨年まで私は京都にある大谷大学の真宗学科に所属していた。この「真宗学」とは、一般的に耳なじみの薄い言葉であると思う。その語感から、多くの人は一宗派の教義学を想像されるかもしれない。つまり、宗祖である親鸞聖人の思想を研究対象とし、その内容を明らかにしていく学問が真宗学であると。しかし、かつて金子大榮は『真宗学序説』（文栄堂）の中で、次のように述べられた。「親鸞聖人の著述を研究するのは真宗学ではなくして、親鸞聖人の学び方を学ぶのが真宗学である」。この言葉は、一度でも親鸞の思想に触れた者ならば、すべからく見失ってはならない大切な指標である。この「学び方を学ぶ」とは、単に方法論を学ぶということではない。それは親鸞という、真実を求めた一人の求道者の姿勢、生き方に学ぶということであって、その際に手がかりとなるべきものが『教行信証』等の著作なのである。つまり思想を通して、その人の精神や問題意識に触れていくことこそが重要なのであって、そのための手段と目的が入れ替わってはならないことを強く思うのである。

親鸞仏教センターの研究員になり、はや四ヶ月が過ぎようとしている。なぜ、今このようなことを改めて確認するのかといえば、センターを通じてさまざまな有識者の方々と対面していく中で、このセンターにおいて行われる活動が、まさに真宗学というものを基盤とするものでなければならないことを、私自身が強く感じているからである。何か一つのことを専門的に学んでいけば、そこに必ず自負心が生まれ、自分なりの解答を作り上げてしまう。しかし、親鸞の思想と現代の問題を切り結ぼうとすると、このような「答え」を前提とした、「答え合わせ」のような姿勢で臨もうとすれば、それは決して対話とならない。私たちは親鸞の思想の中に何か万能なる「答え」を妄想するのではなくて、親鸞が何を見て、何を悲しみ、何を問題としていたのか、その「問い」に学ばなければならない。その「問い」が、現代を生きる一人ひとりの目の前にある「問い」と連結されることによって、そこに真宗学というものが、はじめて公開されるのではないかと思うのである。そして、そのプロセスを踏むことこそが、多様化、複雑化していく現代の問題に対して、親鸞の思想が向き合うことのできる、唯一の手だてであると確信する。教えというものが移り行く時代の問題に答えうるのは、その時代時代を生きてきた人間の苦悩や悲しみをくぐって、絶えず表現され続けてきたからに他ならないからである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑩

信ずる自覚

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第36回、37回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「第18願（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第35回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 深信自身

善導は、『観無量寿経』の三心の「^{じんしん}深信」を釈して、深い心というのは、深く信ずる心だと。何を深く信ずるかということ、一つには、「自身は現にこれ罪惡^{ざいあく}生死^{しやうじ}の凡夫^{ぼんぷ}、^{こうこう}曠劫より已来^{このかた}、常に^{もつ}没し常に^{るてん}流転して、^{しゆつり}出離の縁あることなしと信ず」（『真宗聖典』215頁、東本願寺出版部）と。だから、自分から仏に成るなどということはできないと深く信ずる。これを第一深信というふうに申しております。二つには、仏の本願の力が摂取して、必ず浄土に往生せしめるはたらきをもってわれわれを包むのだから、それを信じて、それに乗る。「かの願力に乗じて、定んで往生^うを得と信ず」（同）と。これを、後の人間が、第一深信は「機の深信」、第二深信は「法の深信」、仏法そのもの、本願のはたらきそのものの深信だと。

この第一の機の深信を、親鸞聖人の『愚禿鈔』では「深信自身」、自身を深く信ずると。この自身を深信するという言葉を曾我量深先生が取り出して、「自身を深信す」というテーマで講演をされた。その時は、本当に不思議な感

じがしました。自身が曠劫より已来流転してきた、出離の縁がない。つまり、たすかるような縁は与えられないのだと信ずる。それで曾我先生は、本当にたすからない身だと信ずることができるが、自分を深く信ずることなのだとおっしゃるのです。曾我先生は、親鸞の三心の理解の言葉は、徹底的に機の深信だと。つまり徹底的に否定形でいただいていく。人間は不実である。虚偽である。罪業である。真実ではない。如来のみが真実。人間は徹底的に嘘である。

普通の理解では、自身を信ずるというのなら、自分の可能性とか自分を善しとする、何かそういう肯定的なものを信ずるというのが普通の理解で、だから、それは自尊心とか、自負心とかと重なるような自身です。ところが、それがいかに頼りないか。いかに迷信とか邪信とか、あるいは教育とか情報とかに巻き込まれて嘘を信じてしまうか。情報をみんな信じて一緒にひっくり返されるわけです。でも虚偽の中で人間は何かを信じて生きている。そういうあり方でたすかろうとするけれど、たすからない。そういう時に、信心でたすかるとはどういうことか。逆に、そういう時に、さとりではたすからないとはどういうことかを、親鸞という人は徹底的に考えたのです。深く自身を信ずる。その自身の内容は、曠劫より已来流転してきた身である。自身がたすかる可能性がないと信ずることが、どうやってできるのか。ここに大きな謎があるのです。

■ 法蔵菩薩の自覚

曾我先生は、これは結局、自覚の問題だと。自覚といっても、自分の意識を自分で反省するような、いわゆる self-consciousness という意味の自覚ではない。人間が自分で自覚できるかという、人間はどうしても甘くなるから、本当に深く自身はたすからない身だと信ずるなどということはできない。われわれは、中途半端なのです。やはりどこかでたすかるよ、どこかで自分は善い面もあるよと思いたい。徹底的にたすからない身だと考えたなら、絶望だと考えてしまう。機の深信は絶望ではない。法蔵菩薩の自覚なのだ。物語でいうと、法蔵菩薩は「十方衆生よ」と呼びかけて、あらゆる衆生をたすけたいという願心の名前ですから、願心の名前において自分を自覚すると、本当にたすからない身だということが出てくる。それは法蔵菩薩の心なのだと。こう曾我先生はおっしゃるわけです。法蔵菩薩の自覚は、それがそのまま、闇が光に転ずる契機なのだ。

われわれは中途半端だと、自分も信ずることもできないし、如来の願いを信ずることもできない。だから、曾我先生は、親鸞は地獄に足をつけているのだという表現をされるわけです。自分の存在は地獄に足がついた存在。地獄に足をつけて立ち上がって、浄土の空気を吸う。こう表現するのです。

■ 回向の信心

結局、信心によってたすかるということは、深く存在を自覚することによってたすかるということなのです。たすけてくれるものがあるからたすかるのではなくて、信が成り立つとたすかる。その信の構造は、内にたすからない身の自覚と、たすけずんば止まんという願のはたきとのぶつかる場所が、ここだと。こういうふうに教えられて、それを信ずる。だから、こちらに何かまだ能力があったり、可能性があったりする間は、如来は要らない。物語も要らない。まったく自分には可能性がないのだと信じられるときに、大きな物語が信じられる。そう

いうふうに法蔵菩薩の物語が信じられてきたのが、浄土の教えの歴史ではないかと思うのです。

そこに本願という願いが語られて、願いの一番中心は信心だと。この信心の質を、親鸞は回向の信心というわけです。大悲が、衆生を救いたいという慈悲に全力注入する。それが回向だと。信ずることができない人間に、信を与えたいというのが回向の信だと。回向の信をわれわれが感ずることにおいて、信一つでたすかる。信一つでたすかるということは、信ずることにおいて自覚が成り立つ。深く自分がたすからない身だと信ずるという自覚です。自覚の覚が、さとりという意味ではなくて、自分自身の愚かさを深く気づく。反省してわかるのではなくて、反省が届かない闇が教えられる。

どこまでも愚かな身であり、どこまでも自力の心が抜けない身であるという、そういう悲しみを抱えながら、法蔵願心を信じていこうとした。そこに親鸞の一生の歩みがあったわけです。たすからない身であることをずっと感じながら、にもかかわらず法蔵願心を信ずるときにたすかるのだと。だから、地獄に足をつけて歩むのだということです。そういう不思議な仏教が、信心の仏教として教えられている。そんなふうに私は、親鸞独自の信の構造というものをいただいていくことができるのではないかと思います。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年12月1日(火)午後6時30分～9時

2011年 1月6日(木)午後6時30分～9時

2月1日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうところをすて、みをたのまず、あきところをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。具縛は、よろずの煩惱にしばられたるわれらなり。煩悩は、みをわずらわす。悩は、こころをなやますという。屠は、よろずのいたるものを、こらし、ほふるものなり。これは、りようしというものなり。沽は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五二―五五三頁)

語 註

①「多」は、大のころなり。勝のころなり。増上のころなり。龍樹は『十住毘婆沙論』(淨地品)の中で、「信力増上」に関して、「多」「勝」「大」という言葉を用いている。その文を親鸞は、『教行信証』『行巻』(『真宗聖典』一六四頁)に引く。

試訳をめぐって

【原文】「但使回心多念仏」というは、「但使回心」は、ひとえに回心せしめよということばなり。

【現代語訳】「但使回心多念仏」の「但使回心」は、ただ如来のはたらきに帰して回心なさいという言葉である。

はすなわち、他力の本願がこの上ないことによるのである。自力のころを捨てるということは、種々さまざまな人びと、すなわち、どんなにすぐれた聖人であれ、どんなに愚かな凡人であれ、自分自身を善しとすることろを捨てて、わが身を頼みとせず、我が思いで自らを悪しとすることろにとらわれないということである。それによつて、「具縛の凡愚」「屠沽の下類」は、ひとすじに、無碍光仏(阿彌陀如来)の不可思議の本願、広大なる智慧の名号を深く信じるならば、煩惱を離れられない身のままで、無上大涅槃、すなわちこの上ない本願の用らきを得るのである。「具縛の凡愚」とは、あらゆる煩惱に縛られている我らのことである。「煩」は身をわずらわすということ、「悩」はこころをなやますということである。「屠」は、さまざまな生きものを殺し、切りさばくものことで、獵師のことである。「沽」は、さまざまなものを売り買いするもので、商人のことである。これらを「下類」というのである。

「但使回心多念仏」、この言葉を親鸞は『行巻』(『教行信証』)にも引いている。すなわち、「ただ回心して多く念仏せしむれば」(『真宗聖典』一八一頁)の文である。それが、『唯信鈔文意』では「但使回心」「多念仏」とふたつに分けられて註釈されているのだが、これによつて、「回心」という宗教体験に力点が置かれることになり、「多念仏」にあつては数の問題ではなく、信心を表す言葉として読まれている。先の「行巻」とは異なり、ここでは「信巻」の視点から解釈が試みられていることに注目される。

「ひとえに回心せしめよ」。この「せしめよ」の試訳について、研究会では活発に意見が交わされた。そもそも、この言葉の分かりづらさは、「自力の心をひるがえし、すつる」のは衆生であるということと、そのかけには如来の用らきがあるのだということを、一語で言わんとしているところにある。例えば、「回心しなさい」「回心させなさい」ではその意を尽くしているとは言えないだろう。

「せしめよ」がもつ隠れたニュアンスをも失わずことなく、なおかつ「但」の一字にある「このこと」「つ」という力強さを込めて、この度の試訳となった。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

『añjali』第20号および

『現代と親鸞』第21号を刊行

このたび、『añjali』第20号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第21号(写真下)を刊行しました。

『añjali』第20号では、山梨大学大学院医学工学総合研究部教授の香川知晶氏、東京大学大学院法学政治学研究科教授の荻部直氏、弁護士・紀藤正樹氏、映画作家の想田和弘氏、臨床心理学者の小沢牧子氏、京都大学名誉教授の片井修氏、東京大学医学部教授の本間之夫氏、成城大学文学部教授の小田亮氏、大谷専修学院長の狐野秀存氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第21号では研究論文のほか、「現代と親鸞の研究会」から、立教大学文学部教授の河野哲也氏の問題提起と質疑、「現代の諸課題と対話する研究会」からフランススコ会社司祭の本田哲郎氏のインタビュー内容、「第2回親鸞仏教センター研究交流サロン」から、作曲家であり指揮者の伊東乾氏からの発題。また、「公開講演会2009」から、広島大学名誉教授の松田正典氏の講演と、NPO法人「場の研究所」所長の清水博氏を迎えてのパネルディスカッションの様子。さらに、「親鸞思想の解明」から本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。

añjali



現代と親鸞
第21号

発行所	親鸞仏教センター
発行日	2009年11月
発行部数	1,000部
定価	1,000円(税別)
購読料	1,000円(税別)
購読申し込み	親鸞仏教センター

『聖典』の試訳（現代語化）

「みずからがみ」ということが取り上げられている。「み」とは「身」のことである。本研究会では、前後の文章とのつながりを考慮した結果「自分自身」という試訳が施されることとなったのであるが、他の案も検討されて、それが意義深いものであった。

例えば、「身を入れる」という表現がある。その場合の「身」とは、「こころ」「精神」をも含めた「身」ではないのか、というのである。善導大師が言うところの、

「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」

という、そういう「身」であると言うのである。親鸞の言う「みずからがみ」とは、自らの存在まるごとを指した言葉であり、「全存在」という意味ではないかと。

我われが普段頼みにしているわが身、わが心がどういうものであるのか…。

「反省した自分を善しとする」「自己反省すら我執の中にある」「有限であることを忘れて…」。研究員の口からは、そんな言葉が漏れ聞こえてきたのだった。

（嘱託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑫

原文

「但使回心多念仏」というのは、「但使回心」は、ひとえに回心せしめよということばなり。「回心」というのは、自力の心をひるがえし、つづるをいうなり。実報土にうまるるひとは、かならず金剛の信心のおこるを、「多念仏」ともうすなり。「多」は、大のこころなり。勝のこころなり。増上のこころなり。大は、おおきなり。勝は、すぐれたり。よろずの善にまされとなり。増上は、よろずのことにすぐれたるなり。これすなわち他力本願無上のゆえなり。自力のこころをすつというは、ようよう、さまざまの、大小

現代語訳

「但使回心多念仏」の「但使回心」は、ただ如来のはたらきに帰して回心しなさいという言葉である。「回心」とは、自己を頼りにしている日ごろのこころを翻して、捨てることをいうのである。本願が用らく世界に生きる人には、必ず金剛のような信心が発起している。このことを、「多念仏」というのである。「多」は「大」であり、「勝」であり、また「増上」の意味である。「大」は、おおきい。「勝」は、すぐれている、つまりあらゆる善より勝れているということ。「増上」は、すべてにおいて勝れている、ということである。これら

親鸞仏教センターの動き

（2010・8・10）抄出

■2010年

- 8・6 親鸞聖人ご命日のついで
第95回清沢満之研究会
- 8・9 第51回「唯信鈔文意」研究会
第19回英訳「教行信証」研究会
- 8・18 第27回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
第36回（通算・第87回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 8・20 第2回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
第96回清沢満之研究会
- 8・30 機関紙「親鸞仏教センター通信」第35号を発行。
- 9・1 第52回「唯信鈔文意」研究会
学会発表（常塚聡研究員「真宗僧佐田介石における護国思想と護法思想―須弥山説を巡って―」日本宗教学会第69回大会・東洋大学）
- 9・5 第97回清沢満之研究会
- 9・6 第120回英訳「教行信証」研究会
- 9・7 親鸞聖人ご命日のついで
第28回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 9・10 第3回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
第121回英訳「教行信証」研究会
- 9・30 第53回「唯信鈔文意」研究会
第37回（通算・第88回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 10・4 第4回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
第98回清沢満之研究会
- 10・8 第10・22
- 10・15 10・29

現代と親鸞の研究会・第36回

親鸞の思想とハラスメント

東京大学東洋文化研究所教授 安 富 歩



安富 歩氏

2010年7月2日、東京ガーデンパレス（文京区）において、東京大学東洋文化研究所教授の安富歩氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。現代の人間が抱えている生きづらさの正体と、それをどのようにしたら克服していけるのかという課題を、ハラスメントという概念を基にさまざまな角度から研究されている安富氏に「親鸞の思想とハラスメント」をテーマに語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（嘱託研究員 大谷一郎）

■ ハラスメントという概念

人間のまともさというのは、ものすごく複雑なものですから、なにかそれを定型化しようというのは本来不可能なはずです。逆に人間のおかしさ、とんでもなさというものは議論できるかもしれない。だから、どうやったらまともになるかということではなく、どういう状況でおかしなことになるのかと問題を設定すればきちんと議論できるということに気が付きました。そこで、私が到達したのが「ハラスメント」という概念です。つまり、ハラスメント的状况に置かれている時には人はおかしくなってしまう。ハラスメント的状况を解除すればそれなりにまともになる、というようなことを考え始めました。

その後、研究が大きく転換して『複雑さを生きる』（岩波書店）、『ハラスメントは連鎖する』（光文社）、『生きるための経済学』（NHK ブックス）という三つの本を書き、近刊の『経済学の船出—創発の海へ—』（NTT 出版）とあわせて、大体一つまとまり始めたと考えていま

す。その過程でいくつかの発見をしました。私は『論語』に非常に大きな影響を受けて今も研究をしています。『論語』に書いてあることと、現代のことと何ら変わらないのです。二千五百年くらい前でも、人間のありさまは、現代と考え方はあまり変わっていません。また、ブッダの言葉、ガンジーの思想、スピノザの思想、ソローの思想などいろいろなところでいろいろな方々の言っていることが基本的に全部同じことなのです。どういうことかということ、自分自身が自分自身と乖離（かいり）するという状態がよくないことなので、それを何とか自分自身で解消しなさいと。そこがずれてしまうと、いろいろ厄介な問題が生じてしまいますが、そこをきちんと統合するとその問題は消えてなくなる。しかし統合するのはとても難しい、ということなのです。

そのように考えるなかで、もう一人、私が非常に関心をもったのが親鸞です。結局、親鸞が言っていることもそういうことではないかと思うのです。つまり、自分自身のあり方に立ち帰り、それを肯定する。その肯定する根拠は何かということが親鸞の思想のすごいところだと思うのですが、それは阿弥陀にすがればいいのだと。これはものすごく過激なアイデアです。

■ 宗教が創り出すハラスメント

全世界において、宗教的なプレッシャーによって引き起こされているハラスメントというのは意外に強いのですが、一方、日本社会では、宗教というものが人間を原初的に、第一義的に苦しめることがないのです。それが日本社会の大きな特質だと思っています。平均寿命をみても日本人は長寿ですが、これだけ現代社会

のストレスを受けながら長寿であるというのは、宗教的ストレスが少ないということが関係あるのかな、とすら思います。そういうことの背景には、八百年前に起こされた親鸞のイノベーションが関係しているのではないだろうかと最近は考えるようになっていきます。

大抵の宗教は救いと称して、人をハラスメントにかけているケースが非常に多いのです。それは、別に宗教に限らなくても、大学でもそうです。何か権威というものが成立すると、それは必ず人々を救うと称して苦しめることが多いのです。日本社会において宗教的な苦悩というものはあまりないですが、これに対してヨーロッパ人というのは、見た目は合理主義的に行動しているように見えますが、実は宗教的苦悩というものを現代においても、とても引きずっているのだと思います。

現在、主流となっている経済学である新古典派経済学というものの正体は何なのかというと、つまりそれは、プロテスタンティズムなのです。もっと言うとプロテスタンティズムとカトリシズムを融合する理論になっているのです。これはカトリシズム的な選択の積極性を認めつつ、結果としては神が事前に決めて予定していた状態に到達できるというプロテスタンティズムの予定説とうまく調和しています。

■ 魂の脱植民地化

先日、ヨーロッパの Jung Institute (ユング研究所) で「魂の脱植民地化」というテーマで講演してきました。そこで私が言ったのは、自分に対する裏切りということ。それは、子どもが、親から愛情みたいなもの、つまりご飯を食べさせてくれたり、いろいろな物を買ってくれたりといったことは与えられるけれど、どうも愛情を感じられないという状況に置かれていると、子どもはこれが「愛」なのだと思います。子どもとしては、親からの愛情がないと確信してしまったら死んでしまうしかないので。だから、子どもは生き延びるために、愛されている実感がなくても今ここで自分に与えられているのは「愛」なのだと自分自身で思い込もうとする。これを「自分に対する裏切り」とアルノ・グリュンという心

理学者は言っています。

「自分に対する裏切り」は、親との関係に限らず教師や友人との関係などでも起こります。本当の愛情から逃げて、愛情に見えるものに引き付けられてしまう。それがハラスメント地獄です。転がり落ちていくのです。その状態から抜け出すためには、自分は愛されていないということを認めなければならないという非常に厳しいことがあります。

とにかく自分が楽しいと思ったら楽しいし自分が嫌だと思ったら嫌なのだという、その自分の感覚に対して立ち戻るということをしないとだめだということが、魂の脱植民地化なのです。そのための手がかりとして、親鸞の念仏思想は非常に重要だと考えています。

(文責：親鸞仏教センター)

※安富歩氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第22号(2011年3月1日号)に掲載予定です。

安富 歩(やすとみ あゆむ) 東京大学東洋文化研究所教授

1963年生まれ。1991年京都大学大学院経済学研究科修士課程終了。京都大学人文科学研究所助手、ロンドン大学政治経済学専攻リサーチ・アソシエイト、名古屋大学情報文化学部助教授、東京大学大学院総合文化研究科助教授、情報学環助教授、東洋文化研究所准教授を経て、2009年より現職。博士(経済学)。

書著に、『「満洲国」の金融』(1997年、創文社)、『貨幣の複雑性—生成と崩壊の理論』(2000年、創文社)、『複雑性を生きる—やわらかな制御』(2006年、岩波書店)、『ハラスメントは連鎖する—「しつけ」「教育」という呪縛』(2007年、光文社)、『生きるための経済学—〈選択の自由〉からの脱却』(2008年、NHK ブックス) など多数。

なお、『anjali』第21号にご執筆を予定いただいている。



「現代と親鸞の研究会」(文京区の「東京ガーデンパレス」で)

第3回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催(2010年6月23日)

親鸞仏教センターでは、設立以来重ねてきた有識者との交流がさらに展開し、有識者間の研究交流へと発展することを願い、昨年から「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催している。その第3回目を6月23日、東京国際フォーラム(千代田区)にて開催した。

今回は、「いのちの(現場)において仏教は何を語りうるか」をテーマに、東京大学大学院教授の下田正弘氏から発題をいただき(写真)、日本女子大学教授であり、森田療法研究所所長である北西憲二氏からコメントをいただいた後、約30名の参加者の間で意見交換がなされた。

下田氏の発題では、〈現場〉に関わるさまざまな方の、それぞれの死生観を紹介され、われわれ一人ひとりがどのように苦悩と向き合っているかが問われている、と提起された。そして、「生活経験世界を通して、生きた言葉を復活させていく必要がある。さまざまな事態を、経典・教義のどの言葉が最もうまくとらえられているかを発見し、その欲びに立って伝えていくということが順序だと思ふ。仏教には何ができるのか、ということ課題として立てていく場合には、常に問いを問い直していくことが重要であり、それは決して後戻りすることではない」と話された。

続いて、北西氏から「われわれのやれることには限りがあり、その最大の限界設定は『死』であり、その『約束された死』を、さまざまな感情とともに受け入れていく。そこで初めて肥大化した自己意識というものが修正され、真の意味で『生かされている自己』ということが姿を現すのではないか」との提言をいただいた後、参加者による活発な意見交換がなされた。

※内容は、『現代と親鸞』第22号(2011年3月1日号・1冊1,200円)に掲載の予定です。



親鸞仏教センター研究員と読む——公開輪読会2010

「信念と実践のあいだ—善導・蓮如・清沢を読む—」 参加者募集中!

2010年度の公開輪読会は、東京大学仏教会館(文京区・本郷)において、「信念と実践のあいだ—善導・蓮如・清沢を読む—」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に仏教の聖典をひもとく、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思ひます。

初めての方もどうぞお気軽にご参加ください(以下の詳細は、開催日程順です)。

■「現代から『御文』を読む」(全4回)

趣旨文 蓮如が、平易な日常語で多くの人に向けて仏教の言葉を語り直したのはなぜだったのか。現実社会の苦悩と真向いになることなしに、仏教を語ることはできないという真摯な自覚がそこにはあったのではないか。蓮如の『御文』を通して、現代の時代という現実の中を生き抜く思想として仏教を改めて問い直したい。

日 時: 2010年11月29日(月)
12月6日(月)、13日(月)、20日(月)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当: 常塚 聡(つねづか あきら) 研究員
テキスト: 『御文』、『真宗聖典』(東本願寺出版部)
より抜粋

資 料 代: 500円(4回分)



■「善導の宗教的信念に学ぶ—『観経疏』『玄義分』を読む—」(全4回)

趣旨文 親鸞の思想、特に有名な「悪人正機」などに代表される、罪の問題を考えようとするとき、決して善導教学を無視することはできない。人間のもつ根源的な罪悪性を、偽ることなく徹底して見つめていかれた善導大師の宗教的信念は、虚構に溢れる現代社会を生きていくうえで、大切な指標となるはずである。今回はその善導大師の著書である『観経疏』の中で、最もその要義が集約された「玄義分」を、一緒に読み進めていきたい。

日 時: 2011年1月7日(金)、14日(金)
21日(金)、28日(金)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当: 花園一実(はなその かずみ) 研究員
テキスト: 『観経疏』より抜粋

資 料 代: 500円(4回分)



■「近代日本と仏教—『精神界』を読む—」(全4回)

趣旨文 雑誌『精神界』所収の清沢の論文には、〈精神主義〉として喧伝された晩年の彼の思想が示されているとともに、読み手を仏教や哲学の専門家に限ることなく、広く一般に自らの思想を伝えようとした試みを感じ取ることができる。清沢は、激動する当時の日本社会に何を訴えかけたのか。『精神界』に掲載された論文より数点を取り上げ、明治後期という時代背景も考慮しつつ読み解いていく。

日 時: 2011年2月7日(月)、14日(月)
21日(月)、28日(月)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当: 春近 敬(はるなか たかし) 研究員
テキスト: 『精神界』所収論文(『清沢満之全集』六、岩波書店)
より抜粋

資 料 代: 500円(4回分)



■申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代をご負担願います。定員35名。連続12回の講座ですが、途中からの参加も受け付けます。

親鸞仏教センター公開輪読会2010係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

■会 場

東京大学仏教会館2階ホール
(文京区本郷三丁目・日本信販ビル2階)

東京メトロ丸ノ内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分



『親鸞仏教
センター通
信』2011年
6月1日号
は休刊いた
します。